様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４４８９

研究課題名（和文）青少年の挫折経験に関する人間形成論的研究ー「生の語り」の分析からー

研究課題名（英文）Research on human formation process of adolescents triggered by negative experience-Based on analysis of biographic-narrative interviews

研究代表者
鳥光　美緒子（Torimitsu, Mioko）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：１０１５５６０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ビオグラフィー法に基づいて収集したデータの事例分析を通して、人間形成プロセスを解明することを目的とする。これまでもっぱら理論的テクストの解釈を通して解明されてきた人間形成概念を、経験的データに基づいて解明するというアイディアは、ドイツ教育学の「人間形成論的ビオグラフィー研究」に学んだ。上記の目的のために大学生を対象にナラティヴ・インタビューを実施し、収集された事例の中から明示的に「変容」に言及している2事例を「人間形成プロセス」として再構成し、それを通して、人の成長が個人と社会との相互作用に基づいて生起することを、直感的に理解可能な形式で示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
第一に本研究は、これまでもっぱら解釈学的解読に基づいて究明されてきた「人間形成」概念を、経験的研究に基づいて解明することが可能であることを示し、それによって人の成長過程を、「発達」とも「社会化」とも違う、個人と社会との相互作用に基づく変容として、経験的に解明する方途が開かれた。第二に本研究は、青少年の人間形成過程を、固有の欲求を持つ個人と社会的要請との葛藤とその乗り越えのプロセスとして事例に即して再構成した。事例分析として示される知は、一般化され抽象度の高い理論値とは異なる、青少年とその支援者に、直感的に理解しやすい形式で提供され、彼らに対して問題発見的な知として機能することが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the typology of ‘ Bildungsprozess ’ (human formation process)through case analysis of data collected based on the method of biography. The idea of elucidating the concept of Bildung , which has so far been elucidated exclusively through the interpretation of theoretical texts, on the basis of empirical data, relied on the " die bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung " of German pedagogy. Narrative interviews were conducted with university students for the purpose mentioned above. 2 cases, that clearly mention “ transformation ”, were selected from the collected cases to be reconstructed as Bildungsprozess. It showed in an intuitively understandable form that human growth takes place based on the interaction between the individual and society.

研究分野：人文学

キーワード：教育哲学　Bildung（人間形成）　ビオグラフィー　ライフヒストリー　アイデンティティ形成　青年期　学校経験

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、ドイツの一般教育学（日本ではおよそ教育哲学に当たる）においてこの 30 年ほどの間に急速に一つの研究領域として確立されてきた「人間形成論的ビオグラフィー研究」(die bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung, 以下 BoB と略記)に着想を得て企画された。

BoB はもともと、人間形成の研究をもっぱら理論的研究に委ねる事によっては、人間形成概念の十全な解明はできず、経験的研究の知見と付き合わせて検討することが不可欠であるとする、一般教育学領域内部の自己反省的見解に端を発する。この問題意識が、ビオグラフィー（我が国で流布している言い方でいえばライフヒストリー）研究の方法論と結びつくことで BoB 研究は成立してきた。

人間形成の理論的研究と経験的研究の媒介が必要であるとの認識を、本研究は BoB の研究者と共有する。理論と経験の媒介は、科学的研究の自明の前提であって今更課題として取り上げるべきことではないと思われるかもしれないが、戦後の教育科学研究の発展過程においては、人の成長過程に関わる経験的研究はもっぱら「社会化」や「発達」といった概念のもとに行われ、その一方で「人間形成」（Bildung）はもっぱら理論的哲学的なテクスト研究の対象であって、現代的な課題を表現するにもまた現象を経験的に捉えるにもふさわしくない、古びた概念であると捉えられるようになった経緯がある。

本研究の研究者の一致した見解によれば、人間形成概念は、フンボルトによるその古典的な概念以来、個人と社会の関係を主題化するものであり、発達概念によっても、また社会化概念によっても十分には分析できない、社会的要請と個人的欲求との葛藤とそれに基づく、自己と他者、そして世界に対する見方や関係の再編成を扱うものであり、そのような概念であることによって今なお、人の成長を理解する上で不可欠のものである。

２．研究の目的

本研究は、ナラティヴ・インタビューの事例分析を通して、人間形成過程の類型を明らかにす
ることを目的とする。人間形成の概念については、何らかの否定的経験を契機とする変容過程と いうコラーの規定(Koller2012)を、本研究の出発点とした。以下の「3. 研究の方法」に詳述する
手順で収集されたナラティヴは、事例ごとに上記の意味での人間形成過程として再構成され、再 構成された人間形成過程に基づいて、当該個人の人間形成過程の特徴が検討される。長期的には、 以上のような事例分析の知見を積み重ねて、人間形成過程についての類型化の可能性を模索する。

３．研究の方法

データ収集と分析の方法については、BoB の研究プログラムを参考に、以下のように計画した。調査対象者は、それまでの学校経験において、不登校やドロップアウトなど、目に見えた制度的な逸脱を経験していない大学生である。研究開始前に行なった予備的なインタビューの結果、一見、大きな問題を抱えていないかに見える学生たちも、大学に至るまでの学校生活において様々な挫折や問題に直面してきたこと、また学校生活が豊かな人間形成資源であることが予測できた。

インタビュー法はドイツ語圏で一般的なシュッツェ（F.Schutze）の方法に従った。最初に「思

い出せる最初の出来事から初めて、できるだけ詳しくあなたの人生を語ってください」といった生成質問を投げかけた後は、インタビュアーは、語り手自身が物語の終わりを告げる合図をするまで、途中で口を挟むことはしない。したがってこの方法は、語り手に、自分の人生において有意味であると思える出来事や経験を選択し筋立てて語るよう、促すという特徴を持つものであると言える。

インタビューは、本研究開始以前に行なった３名も含めて合計 16 名に対して行なった。インタビュー時間と調査協力者の属性は以下の通りである。

表１　インタビュー・リスト

	インタビュー時期	インタビュー時間	生年	性別	備考
A	①2015 年 3 月 ②2016 年 7 月	① 2 時間 30 分 ② 1 時間 40 分	1991 年	女	録音不備のため、再度インタビューを実施。
B	2015 年 3 月	3 時間	1992 年？	男	
C	2015 年 4 月	2 時間	1991 年？	男	
D	2016 年 8 月	2 時間 10 分	1996 年？	男	
E	①2016 年 8 月 ②2017 年 3 月	① 1 時間 10 分 ② 1 時間 15 分	1995 年？	女	インタビュー内容の確認のため、再度インタビューを実施。
F	2016 年 8 月	１時間 50 分	1996 年？	女	
G	2016 年 10 月	2 時間	1996 年？	女	
H	2016 年 10 月	2 時間	1994 年？	男	
I	2016 年 11 月	2 時間	1995 年？	男	
J	2016 年 11 月	2 時間 45 分	1995 年？	女	
K	2016 年 11 月	2 時間 30 分	1996 年？	女	
L	2016 年 12 月	1 時間 52 分	1994 年？	女	
M	2017 年 12 月	2 時間 54 分	1998 年？	女	
N	2017 年 12 月	2 時間	1998 年？	女	
O	2017 年 12 月	2 時間 10 分	1997 年？	女	
P	2018 年 8 月	1 時間 10 分	1995 年？	女	

４. 研究の成果

現在、論文として公刊しているのは、事例 E と事例 J の分析である。その他、学会のコロキウ

ムや事例検討会において、一名ないし複数名によって解読の報告があった事例に、C、D、I の 3 つの事例がある。

E と J の事例に着目したのは、それらの事例においては、明確に「変容」ないし「転機」が語られていたことによる。とりわけ E は「転機」を契機とする劇的とも言える自己変容のプロセスを語っており、これについては野平(雑誌論文⑤)、鳥光(雑誌論文③)と藤井(雑誌論文①)のそれぞれの論文が公刊されているほか、共同の解読結果を 2018 年度のドイツ教育学会で報告した(学会発表①)。また J については野平の解釈が学会で分析を提示した (学会発表②)。

１）E の事例、

E は、1995 年生まれ、4 歳のとき、両親が離婚し、母親の実家で育つ。母親の実家は４世

代にわたって、ある仏教系宗教団体の信者である。地元の公立小中学校を卒業後、所属する教団系列の高校に進学、教団の寮から学校に通う。

彼女の場合、中学時代に知った母親の恋愛事件を引き金に、子供たちを差しおいて相手に走る母親を責める気持ちと「いい子」でいなければならないという強い自己規制との葛藤が長年にわたって続き、ついにはこの出来事そのものを忘却するに至る。だが、大学入学後、教団の年配信者に親身に、 彼女の人生についての話を引き出すべく関わってもらう機会をえて、母との出来事を想起。さらに年配信者とのやり取りを通じて、「教え」の意味を改めて悟り、仏の眼差しを通して現実を捉えることで、家族に対する気持ちは激変し、家族との関係も改善する。人間形成論的重要なのは、この回心過程に付随して、彼女自身の自己関係の変容が語られ、自他に厳しく自己規制を要求する「いい子」からより柔軟な自己関係へと変容したと述べられることである。

２）Ｊの事例

Ｊ の家族は両親と妹一人の四人家族である。中学は国立大学附属、高校は有数の進学校である公立高校を経て地元の大学に通う。

Ｅの場合とは対照的に、変容の決定的な契機や出来事が述べられる訳ではないが、彼女のナラティヴは、彼女いう「思春期」をキーワードに、「思春期」以前と「思春期」、そして「思春期」からの脱却という、大きく三つの局面に整理されうる。

思春期以前を特徴づけるのは、世界を経験の宝庫とみる世界関係と、「目立たちがりや」という自己規定である。一方、思春期への突入は、学力や能力に関わる現実的な自己判断と、人間関係上の軋轢によって多少とも輝きを失った世界との関係によって特徴づけられる。彼氏との親密な関係を築くことで、「面白くないような」学校世界の現実から距離を保っていた高校時代を経て、インタビュー時点では、遠距離恋愛に伴う彼氏の不在のもたらす孤独感を引き金に、世界との関係性の再構築を目指す努力の数々と、そして多少とも再構築された他者関係が言及された。

３）C、D、Ｉの事例

これらの事例分析は未だ途上であるが、能力と達成の問題系が、そのいずれの事例でも、学校生活における有意味な経験として取り上げられていることは指摘できる。また、ＣとＤの事例では、それに加えて、人間関係に関わる問題系もまた、葛藤とそれを克服する努力を誘発する出来事として語られた。少数の事例に基づく暫定的な仮説であるが、能力と達成の問題系と人間関係のそれとが、人間形成に有意義な学校経験の代表例であると捉えていいのではないかと推測される。

４）　達成と課題：　上記の事例分析を通して何が明らかになったのか

① わが国の教育哲学研究ではこれまで「人間形成」概念はもっぱら解釈学的に、理論的テクストの解読に基づいて行われてきた。これに対して本研究は、人間形成概念もまた、経験的な研究を通してコントロールすることが可能であることを、実際にナラティヴ・インタビューの事例分析を通して明らかにした。これによって人の成長過程を、「発達」とも「社会化」とも違う、個人と社会との相互作用に基づく変容として、経験的に解明する方途が開かれた。

② 事例分析においてナラティヴは、固有の欲求をもつ個人が社会的要請と葛藤しつつ、その葛藤をどのように乗り越え（ようとし）たのかという観点にそって再構成される。事例分析として提示される知は、青少年とその支援者に対して、「発達」など、一般化された抽象度の高い理論知とは異なって直感的に理解しやすい形式で提供され、一般化とは別の、問題発見的な知として機能することが期待される。ただしそのためには、変容過程の類型化など、一般化とは

異なるレベルでの理論化の方途が模索される必要があると思われる。

一方、BoB をさらに推進するにあたってのさらなる課題もまた明らかになった。

③ 本研究の研究期間においては、変容プロセスの解明を優先させたため、学校経験のもつ人間形成的な意義については、C、D、I の事例を参照して、能力と達成と人間関係との二つの問題系が人間形成上有意義な出来事や経験として取り上げられる傾向のあることが指摘されるにとどまった。上記三事例はいずれも、E や J の事例とは異なって、明確な変容が見出せない事例であるが、その重要性が昨今ますます認識されつつある生徒理解に対する社会的貢献を考えるとき、 むしろこのような事例の分析こそが重要であると思われる。

④ シュッツェのインタビュー法は、人間形成上有意義な経験の選択を調査協力者に委ねるもの であり、個に即した人間形成過程の解明に適したデータの収集に優れて有効な方法であることが明らかになった。一方で、事例分析の進め方については課題が残った。北米のライフヒストリー研究では、事例分析に際して、内容分析にととどまらず形式に着眼することが重要であることがつとに指摘されており(例えばリースマン 2014)、シュッツェの分析法のみならず広く分析方法に関する 研究の知見に学びつつさらに、事例分析の手順を洗練させる必要がある。

⑤ 人間形成という概念は、規範的な含意を特徴とするが、本研究では、再構成された人間形成過程を規範的観点から検討することは課題として残された。直感的に見て変容を遂げた事例、変容に未だ至らない事例の双方の事例を対比するなど、分析の手順について再考することが必要である。今後さらに検討を続ける。

＜引用文献＞

Koller, H.-Ch. （ 2012 ） , Bildung anders denken. Einführung in die Theorie taransformatorischer Bildungs-prozess. Stuttgart.

リースマン, C. K（大久保功子・宮坂道夫訳）（2014）、『人間科学のためのナラティヴ研究法』、クオリティケア.

５. 主な発表論文等

［雑誌論文］（計　5 件）

① 藤井　佳世、彼女は先行する世代の問題をどのように継承したのかーある大学生のインタビュー解釈―、『教育学論集』、査読無、第 60 集、2019、pp.211-230

② 鳥光　美緒子、藤井　佳世、野平慎二、人間形成論的ビオグラフィー研究の進め方ーインタビューから解読までー、『近代教育フォーラム』、査読無、第 27 号、2018、pp.134-136

③ 鳥光　美緒子、成長するとはどういうことかー事例にもとづいて考えー、『教育哲学研究』、査読無、第 117 号、2018、pp.80−95

④ 野平　慎二、藤井　佳世、鳥光　美緒子、変容としての人間形成ー理論と経験ー、『教育哲学研究』、査読無、第 117 号、2018、pp.119-125

⑤ 野平　慎二、非弁証法的な人間形成形態の再構成の試みーある大学生のビオグラフィ・インタビューの人間形成論的読解ー、『愛知教育大学紀要（教育科学）』、査読無、67-1、2018、pp.9-16

［学会発表］(計　3 件)

① Mioko Torimitsu, Shinji Nobira, Kayo Fujii, Familienkonflikt, religioese Beratung und Transformation – Interpretation ueber Erzaehlung einer japanischen Studentin, Deutsche gesellschaft fuer Erziehungswissenschaft, 2018

② 野平 慎二、H,-Ch. Koller、真壁　宏幹、鳥光　美緒子、変容としての人間形成−理論と経験の間−、教育哲学会ラウンドテーブル、2017 年
③ 鳥光　美緒子、藤井　佳世、野平　慎二、藤川　信夫、森田　伸子、人間形成論的ビオグラフィー研究の進め方−インタビューから解読までー、教育思想史学会コロキウム、2017 年

６. 研究組織

（１）研究分担者

氏名：　野平　慎二
ローマ字氏名：（NOBIRA, Shinji）
所属研究機関名：　愛知教育大学
部局名：　教育学部
職名：　教授
研究者番号：50243530

氏名：　藤井　佳世
ローマ字氏名：（FUJII,Kayo）
所属研究機関名：　横浜国立大学
部局名：　教育学部
職名：　准教授
研究者番号：50454153

（２）連携研究者

研究分担者氏名：　山田　浩之
ローマ字氏名：（YAMADA,Hiroyuki）
所属研究機関名：　広島大学
部局名：　教育学部
職名：　教授
研究者番号：60258324

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。